

書評

高田英樹（編訳）

『原典 中世ヨーロッパ東方記』

（名古屋大学出版会、二〇一九年）

村田 光司

二〇一三年にマルコ・ポーロ&ルステイケツロ・ダ・ピーサ『世界の記』・「東方見聞録」対校訳』（名大出版会）を、二〇一六年に『マルコ・ポーロとルステイケツロ：物語「世界の記」を読む』（近代文芸社）を出版し大きなインパクトを与えた高田英樹氏（以下「訳者」）が新たに上梓したのは、一三世紀から一四世紀にかけてヨーロッパで編まれた、一五点（プラスアルファ）に及ぶ様々な「東方」、なかなかなくモンゴルに関する諸記録の編訳である。個人の手になる史料翻訳としては近年類を見ない規模の労作であり、なによりも先に畏敬の念を禁じえない。訳出された作品は、目次に沿えば以下の通りである。

第一部

- 一 マシュー・パリス『大年代記』（抄）
- 二 カルピニ『モンガル人の歴史』（附「ベネディクトゥス・ポロヌス修道士の報告」、「タルタル人皇帝宛教皇インノケンティウス四世書簡」、「インノケンティウス四世宛グユク返書」）
- 三 シモン・ド・サンカンタン『タルタル人の歴史』
- 四 ルブルク『旅行記』（附「ルイ九世宛エルチギデイ書簡」、「ルイ王宛オグル・ガイミシュ返書」）
- 五 リコルドゥス・デ・モンテ・クルキス『巡礼記』（抄）
- 六 マルコ・ポーロ／ルステイケツロ・ダ・ピーサ『世界の記』（抄）
- 七 ハイトン『東方史の華』
- 八 モンテコルウイーノと修道士たち（「クビライ宛ニコラウス四世書簡」、「フィリップ四世宛アルグン書簡」、「モンテコルウイーノ書簡（三通）」、「ザイトン司教ペレグリヌス修道士書簡」、「アンドレアス・デ・ペルシオ修道士書簡」）
- 九 オドリクス『東方記』
- 一〇 マリニョッリ『ボヘミア年代記』東方記事（抄）（附「ベネディクトゥス一二世宛トゴン・テムル書簡」、「ベネディクトゥス一二世宛アラン人君侯たちの書簡」）

第Ⅱ部

- 一 一 プレスビテル・イオハンネスの書簡
- 一 二 ペゴロツティ『商取引実務』（抄）
- 一 三 ボツカッチオ『デカメロン』（抄）、「チポツラ修道士の旅」、「ナタンとミトリダネス」
- 一 四 ファイレンツェ・サンタ・マリア・ノヴェツラ教会スペイン礼拝堂壁画
- 一 五 カタラン・アトラス

大きく二部に分かれたうちの第Ⅰ部は東方に関する直接的な記録を、第Ⅱ部はより間接的な証言ではあるがユニークな作品群を扱う。信じ難いことに、以上のうち二、三、四、七、八、九、一一は（ほぼ）全訳である。本来であればいずれの作品も（訳者自身述べるように）単独でモノグラフィとなる対象であり、また各々の史料としての性格も様々である（従って本来であれば、章ごとの「書評」が必要となる）。基本方針として訳者は、すべて校訂本（可能であれば写本も参照）に基づく原典からの翻訳であることを掲げ、各作品の性格や背景、写本、校訂、既存訳について簡単な解説を付している。あらかじめ訳文について述べておくならば、全体として直訳調ではあるものの読みやすく、訳者の文学研究者としての側面がいかんなく発揮されている。

史苑（第八〇巻第二号）

る。

以下では作品ごとに簡単な所見を述べ、次いで本書全体に対する若干の指摘を行うことで書評の責を塞ぎたい。評者の第一の専門はビザンツ史であり、また紙幅の都合上ここに訳出されたすべての作品について詳しく論評することはできない。むしろ本書評は本訳書の補遺となることを願って、訳文そのものよりも、参照されるべき関連研究の指摘に重きを置くこととする（なお各章の著者名と作品名は、訳者のそれに従う）。

第Ⅰ部、第一章は一三世紀中葉にセント・オールバンズ修道院で活動したマッシュュー・パリス（一二〇〇年頃—一二五九年）の『大年代記』から、モンゴルのヨーロッパ進出に関する一二四〇年から一二四四年までの一〇の記事を訳出する。これらはモンゴルがいよいよハンガリーやポーランドを襲撃し、西ヨーロッパ世界が彼らの具体的な情報を入手し、差し迫る恐怖に混乱する様子をよく伝えている。マッシュューの情報源は、東ヨーロッパでの事件の目撃者や近い関係者、そしてイングランド王家に届いた数多くの書簡であり、西ヨーロッパ世界が当時得られた情報の内容と形をかなりの程度再現している点で価値が高い。個別の記事はこれまでも邦訳されたことがあるが、原文のラテン語から纏まった数の記事を訳出したのは本書が初めてで

あろう。ただ訳者は、訳出部分の選択基準については細かく述べていない。実際のところマシューは他にも二〇箇所ほどでモンゴル関連の記述を残している。とりわけモンゴルの「最初の記録」（五頁）は一二四〇年の記事ではなく、すでに一二三八年の記述のなかに、「サラセン人」（イスマール派）使節が「タルタリ」の侵攻をフランス王とイングランド王に伝えた記事が存在している。これも邦訳に含めれば一層価値が増したであろう。蛇足ながら、ヨーロッパとモンゴルとの接触を示すのであれば、マシューよりも早期に著された記録を訳しても良かったように思う。例えばハンガリー王ベーラ四世の命により一二三五年と一二三七年にカスピ海北方へ派遣されたドミニコ会士ユリアヌスは、³着実に迫るモンゴルの不気味な姿を彼の報告書で伝えている。⁴

細かい点をいくつか指摘すると、冒頭「写本」説明（四頁）において、『大年代記』の自筆写本が一二五三年までの記述で終わり、その縮小版である『Historia Anglorum』が一二七〇—一二五三年と上記の続き一二五四—一五九九年を収める」とあるが、正確には『Historia Anglorum』も一二五三年の記述で終わり、以降五九年までの記述は別の写本で伝わる。⁵ 訳文では、「フンガリア／ハンガリア」（Hungaria）、「アウストリア／オーストリア」（Austria）

の表記ゆれがみられる。一三頁下から四行目の「常なる」（semper）は「後継者」ではなく「アウグストゥス」に掛かるだろうか。

第二章は、教皇インノケンティウス四世によりモンゴル宮廷へと派遣され、一二四六年にグユクと面会したフランシスコ会士カルピニ（一一八五頃—一二五二年）の『モンガル人の歴史』全九章の訳である。周知の通り、カルピニのこの報告書はモンゴル帝国のまとまった事情を初めてヨーロッパにもたらした点で、同時代のヨーロッパ勢力にとっても、現代の研究者にとっても抜きん出た価値を持つ。日本語では、第四章のルブルクとあわせ護雅夫による英語とドイツ語からの重訳があったが、ラテン語原文からの日本語訳は本書が初である。ただし残念ながら訳者が依拠した校訂本（一九二九年）は、すでに一九八九年にE・メネストラによる新版によって置き換えられており、後者を底本とすべきであった。⁶

本章には付録として、カルピニに同行した修道士ベネディクトゥス・ポロヌスの報告、カルピニらが持参したタタル人皇帝宛教皇インノケンティウス四世書簡、⁷そしてこれに対するグユクの返書。ペルシア語版の邦訳も載せられている。最後の文書は宮紀子氏によって原文から邦訳されたものである。⁸

第三章は、カルピニと同時期に教皇によって、西アジアに駐屯するモンゴル軍司令官バイジュの元へと派遣された使節の一人、シモン・ド・サンカンタンの報告書『タルタル人の歴史』である。この作品自体は現存しないが、今日われわれはヴァンサン・ド・ヴォーヴェの『歴史の鏡』にみられる大部の引用からその大要を復元することが出来る。この引用部分はJ・リシャールによって纏められ一九六五年に出版されており、現在でもこれが決定版となっている（訳者もこれを利用）。しかし評者の知る限りこれまで現代語の全訳は（訳者は参照していないが）フランス語とトルコ語でしかなく、本書で日本語訳がなされたことは快挙と言つてよい。

とはいえシモンのテクストについては日本語でも海老澤哲雄による研究があり、これを参照していないのは惜しまれる。例えば第三八節（一五一—一五二頁）でシモンが記すグユクの即位式の様子の情報源については、訳者が註で挙げる可能性（シモン以外のテクストからの混入）のほかにも、海老澤が指摘するようにシモンらがエルチギデイ（アングタ）一行から聞いた可能性も残されている。またシモンのテクスト末尾には「インノケンティウス四世宛バイジュ書簡」および「バイジュ宛グユク書簡」も付されており、訳者もペリオラの研究を参照しているが、これらにつ

いても海老澤の研究がより新しく詳細である。

第四章は同じくフランシスコ会士であるウイリアム・ブルクの『旅行記』全訳である。彼はフランス王ルイ九世の命により一二五三年から一二五五年にかけてモンゴル帝国の都カラコルムへと派遣された。ブルクの報告書は、通過したアジア各地の記録もさることながら、都事情の詳細な記述に高い価値が認められる。また彼のカラコルム滞在時に、ニカイア帝国やアルメニアからも使者が訪れていた記述は、西ユーラシアにおいて西欧以外にモンゴルと積極的な交渉を行った勢力の存在に光を当てている。第二章のカルピニと同じく、護雅夫による重訳があるが、ラテン語原文からの日本語全訳は初である。また冒頭には、ブルクの旅の直前の情勢を伝える「ルイ九世宛エルチギデイ書簡」、「ルイ王宛オグル・ガイミシュ返書」訳も付されている。ただし残念ながらブルクについても、訳者が底本とした一九二九年の校訂本は二〇一一年にP・キエザによる新版によって置き換えられており、こちらの参照が望まれる。また研究者のあいだで普及しているP・ジャクソンとD・モーガンの英訳も言及されるべきだっただろう。本文訳については、わずかな表記ゆれ（「ウアスタキウス」と「ヴァスタキウス」など）の他に評者が気づいた点として、第三六章に採録されるフレグからルイ九世宛書簡冒頭

の「:地に唯一の主チンギスカン、神の子、テムジン・チンゲイすなわち鉄の音、の他になし」(二七四頁)のうち、「テムジン」以降は後ろに続くルブルク自身の注釈の一部であり、書簡本文ではない。またその注釈のうち「今や彼(チンギスのこと―評者)を神の子だと言う」における「神の子」は、後ろに続く(フレグの)「言葉」にかけるべきとの議論もある¹⁸⁾。

第五章はリコルドウス・デ・モンテ・クルキス(一二四三年頃―一三二〇年)の作品を扱う。彼はフィレンツェのサンタ・マリーア・ノヴェツラ教会で研鑽を積んだ後東方へと旅立ち、一二八八年にイェルサレムへとたどり着いた。彼はさらにそこからモンゴル人の支配下にあるバグダードへと向かう。本書で訳出されるのは、そこでの経験を経た書『巡礼記』からモンゴルの習俗について述べた部分である(全体の五分の一ほど)。イェルサレムについては当時の西方ヨーロッパで知られていた知識を大きく超える情報はないものの、モンゴル人や東方キリスト教会についてはルブルクやカルピニにないものを多く含む。訳者が底本とするのはいわゆるW写本(一五世紀)のみに基づく一八六四年の刊本であるが、このテキストについては一九八〇年代にリコルドウスの自筆による写本が発見されており、他の六写本も踏まえてルネ・カブレルが校訂し仏

訳を付した新たな刊本を用いるべきであった¹⁹⁾。

第六章はマルコ・ポーロ／ルスティケツロ・ダ・ピーサの『世界の記』から、フランクIIイタリア語版(F)を元に、ポーロのカシュガルからジャワまでの旅路を扱った箇所²⁰⁾の訳であり、本書の一五〇頁近くを占める。基本的には二〇一三年に刊行された訳書からの部分的再録である。本書に再録するにあたっては、一部訳註や図が付加されているものの、果たしてこれほどの頁数を消費してまで載せるべきだったのかどうか疑問なしとはしない。

第七章は、一三〇七年頃にキリキア・アルメニアの王族ハイトンが著した『東方史の華』の全訳である。四巻からなる本作はハイトンがポワティエに滞在した折、教皇クレメンス五世の求めに応じて献呈した、アジアの歴史と地理に関する叙述である。本作は教皇庁にいたニコラス・ファルコンに口述筆記させたものであり、フランス語で書かれているが、ファルコン自身によるラテン語訳も伝来する²⁰⁾。第一巻はアジアの地理について、第二巻は七世紀に始まるイスラームの進出について、第三巻はモンゴル帝国、とりわけアルメニア王国とフレグ・ウルス(イルハン朝)の關係について、そして第四巻はキリスト教圏とモンゴル帝国の同盟の可能性について、そして新たな十字軍の提案である²⁰⁾。

第八章「モンテコルウィーノと修道士たち」は、一三世紀末に中国に渡り、以後没するまでの三〇年近くにわたってキリスト教布教に努めたモンテコルウィーノ（一二四七年—一三二八年頃）の書簡三通、彼の旅のきっかけとなった「クビライ宛ニコラウス四世書簡」、^{②③}「フィリップ四世宛アルグン書簡」、同じく中国で布教を行ったペレグリヌスとアンドレアスの書簡、以上七通の書簡の訳である。東方における当時の「ネストリウス派」キリスト教徒や中国の様子、そしてそこでの布教の苦労が生き生きと伝わってくる史料であり、他に報告書などの類が伝来していない現在、その価値は計り知れない。ただ一点、「フィリップ四世宛アルグン書簡」はウイグル文字モンゴル語で記されたオリジナルがフランスのアルシーヴ・ナショナルに伝来しているが、訳者が典故として挙げているのはドーソンによるフランス語訳のみである（五七七頁）。とすれば「ただけ」^{②③}「原典」からの訳ではないことになるのでその旨注記すべきではなかったか。

第九章は、一三一〇年代に出発し中国へ向かい、一三三〇年頃に帰還したフランシスコ会士オドリクス（オドリコ）の報告書『東方記』全訳である。本報告書は広汎に流布したが、テキスト批判に難を抱えている。ラテン語版に二つのヴァリアント（G、H）があるほか、「トスカ

ナ覚え書き」と呼ばれるイタリア語版（MT）を始めとする種々の俗語訳も存在する。本書ではG版に拠りつつ、H版とMT版との異なりを示した訳文を提示している。ラテン語からの初の日本語訳である点で本章の価値は揺るぎない。だがこの作品についても、訳者の参照していない、既知のラテン語諸版および俗語版を踏まえた（初の）本格的な校訂本が二〇一六年にA・マルキシオによって出版されている。^{②③} 評者にその成功度合いを判断する能力はないが、訳者がこの校訂本を踏まえていたら、訳文も違う形になっていただろう。

第一〇章はオドリクスが帰還してから数年後、教皇ベネディクトス一二世の命を受け一三三八年にアヴィニョンを出発し大都へ向かったフランシスコ会士、イオハンネス・デ・マリニヨッリ（一二九〇年頃—一三六〇年頃）の作品を扱う。マリニヨッリは大都に数年滞在した後一三三三年に帰還したが、報告書の執筆はしなかったようである。現在われわれが知るのは、後に彼がブラハ滞在の折に委嘱された『ボヘミア年代記』改訂作業の際に付加した、断片的な旅行記事のみである。本書は東方に関わるその一部、およびマリニヨッリ派遣のきっかけとなった、教皇ベネディクトウス一二世宛書簡二通（トゴン・テムルおよびアラン人君侯より）を訳出している。^{②③} マリニヨッリの東方関係部

分については、訳者が利用したヴァインゲルトの校訂本以来新たな写本は発見されていないものの、その後の文献学的検討を踏まえた新たな版が二〇一三年にオンラインで出版されている。^{②③}

第Ⅱ部、第一章は伝説上の東方キリスト教君主として著名なプレスビテル・イオハネス（司祭ヨハネ）の書簡の全訳である。一二世紀のビザンツ皇帝マヌエル一世に宛てられたこのラテン語書簡の偽作者が誰であるかはなおはっきりしないが、この書簡自体は広く流布し、一〇〇点ほどの写本が伝来する。原文からの日本語訳としては訳者も指摘するように池上俊一のものがあるが（二〇〇九年）、本書の訳の登場により、内容の理解が進むであろう。なお二〇一五年にはK・ブルワーによって、近年までの研究史に配慮した英訳と新出写本一覧が出版されており、こちらが参照が勧められる。^{②④}

第二章はフィレンツェの商人ペゴロツティによって一三四〇年頃に編纂されたと考えられる『商取引実務』の抄訳である。本作品は各地の市場取引に必要な種々の情報を集積したものが、そこに記される国や都市の地理的範囲はヨーロッパのみならず東方アジア、中国にまで至り、モンゴルの登場によって変貌した一四世紀商業ネットワークの一端を垣間見せてくれる。^{②⑤}

第三章はボツカッチオ『デカメロン』から二つのお伽噺、「チポツラ修道士の旅」と「ナタンとミトリダネス」を訳出する。東方世界の存在が西欧で受容されていく過程を示すテキストとして興味深い。同じく受容を示す「テキスト」として第四章で訳者が解説するのは、リコルドウス（第五章）とも深い関係を持つフィレンツェ、サンタ・マリリア・ノヴェツラ教会のスペイン礼拝堂壁画（一三六五—一三六八年頃）である。ここでは東方と深い関わりを持つ同時代の教皇や修道会士、マルコ・ポーロ（↑）、そしてタルタル人が壁画プログラムに登場する。絵画におけるモンゴルや東方の表象は、一四世紀イタリアの画家たちが関心を向けたテーマの一つであった。^{②⑥}本章のスペイン礼拝堂壁画プログラムは、具体的な形をもって現れてきた東方諸民族を聖書の物語に如何に組み込むべきか、同時代人からの一つの回答を示す貴重な事例である。

本書の最後を飾るのは第五章、カタラン・アトラスである。西欧における世界認識の拡大は、当然ながら世界図の伝統にも革新をもたらした。マルコポーロやオドリクス（↑）の作品がもたらした東方の情報を初めて全面的に取り込んだのがこの世界図である。四面八枚（および天文学などの解説を行う二面四枚）のパネルからなるこの作品は、一三七五年にユダヤ人の地図作家クレスクス親子によって

描かれたとされ、ユーラシア大陸東西の様々な地名と人々、伝承が絵画と古カタルーニャ語で示されている。訳者はこの八枚に書かれたテキストを原図から逐一翻刻し、訳を付してわれわれに提示する。おそらく日本語では初の試みであり、翻刻や地名同定の苦労は並大抵ではなかったかと思う。訳者はしかし、これまでに全テキスト翻刻の試みがあったかどうか述べていない。実際のところ、一九七〇年代にはカタラン・アトラス制作六〇〇周年を記念してスペイン語、ドイツ語、英語版のファクシミリが出版されており、それぞれに翻刻と翻訳、研究が付されている。訳者が先行研究の⑨に掲げるオンラインソースの「The Cresques Project」(七五八頁)にも、少なくとも英語版の書誌情報は載せられている。加えて地図の構成や情報源については、杉山正明による極めて重要な研究があることにも触れておかねばならない^⑩。

さて本書の意義は、まず訳者自身述べる通り、数多くの重要な作品を初めて日本語に移し、さらにこれまで近代語からの重訳しかなかった作品を原典から翻訳し直し、まとめて提示した点にある。いずれもその性格上、個別の地域だけではなくユーラシア全土の歴史にとって重要な史料であり、それらが一書の優れた個人訳で読めることは、この

上ないメリットである。とりわけラテン語を読まないこの時代のアジア史家、ユーラシア史家にとっては、まさに待望の書ではないだろうか。また類書にない特徴として、とくに第Ⅱ部における文学作品や図像史料の紹介は、読者の視野を広げるのに大いに貢献してくれるだろう。

ただ気になるのは、本書の学術上の位置づけをどのように行えばよいかということである。一読すれば了解されるように、各作品の解説は最小限であり、また訳注もほとんど付されておらず、予備知識のない一般読者が必ずしも容易に内容を理解できるようにはなっていない。また近年の歴史学の研究成果も踏まえられていない^⑪。無論これは訳者の方針に沿ったものであるが、読者は他の文献を読んで知識を補うことが求められる。では一方で翻訳それ自体はどうだろうか。訳者がかつてポロ／ルスステイケツロ『世界の記』の翻訳を出版した際には、同じく訳註は最小限であったものの、底本となるテキストの文献学的研究の存在が学術翻訳としての価値を揺るぎないものとしていた。しかし本書の場合、各作品において用いられた底本には、これまで指摘してきたように、現在の学術的水準を反映していないものがかなりある(特に二、四、五、九、一〇、一五)。研究者が本訳書を参照する際には、新しい校訂版とのテキスト異同を見比べながら用いねばならない。すなわち本書

高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』（村田

は、一般書としても学術書としても中途半端な印象が否めないものである。近年の歴史学・文献学研究を少しでも事前に見ておけば、新たな校訂版の情報も得られたのではないかと思う。概して本書は既存の研究史からやや浮いており、最近の研究との協力関係がなかったことが残念でならない。

最後に、本書が索引を備えていないのは最も惜しまれる点の一つである。すでに別巻で出版されている『世界の記』を削ってでも、主要な事項・人名・地名などは一覧にすべきであったと思う。同一語の容易な比較対照こそが、多種多様な作品群を一箇所にまとめることの大きなメリットであるからだ。索引の欠如は、訳者のマルコ・ポーロ対校訳への書評でも同様に指摘されていたが、本書の価値をさらに高めるためにも、重版の際には対応を期待したい。

いろいろ贅言を述べてきたが、本訳書の圧倒的な価値はまったく揺るぐものではない。中世を学ぶすべての者にとって必須の友となろう。訳者自身が「はじめに」で期待しているように、ここに収録された各作品の良質な校訂本および写本からの全訳そして専門的な註釈や解説は、今後の世代の仕事である。

- (1) Björn Weiler, “Matthew Paris on the Writing of History”, *Journal of Medieval History*, 35–3, 2009, pp. 254–278.
- (2) この点については、その研究の蓄積が、John J. Saunders, “Matthew Paris and the Mongols”, in Thayron A. Sandquist & Michael R. Powicke (eds.), *Essays in Medieval History presented to Bertie Wilkinson*, Toronto, University of Toronto Press, 1969, pp. 116–132; Hans-Eberhard Hilpert, *Kaiser- und Papstbriefe in den Chronica maiora des Matthaeus Paris*, Stuttgart, Klett-Cotta, 1981, S. 153–164; Szusanna Papp, “Artars on the Frontiers of Europe: the English Perspective”, *Annual of Medieval Studies at the CEU*, 11, 2005, pp. 231–246; Altay T. Özcan, “Chronica Maiora da Moggollara Dair Kayrtlar”, *Tarih Okulu Dergisi*, 16, 2013, s. 23–77 以下、略す。
- (3) Henry Richards Luard (ed.), *Matthaei Parisiensis, monachi Sancti Albani, Chronica maiora*, vol. III (A.D. 1216 to A.D. 1239), London, Longman & Co., 1876, pp. 488–489.
- (4) Heinrich Dörrie, “Drei Texte zur Geschichte der Ungarn und Mongolen: Die Missionstexte des Fr. Julianus O.P. ins Uralgebiet (1234/5) und nach Rußland (1237) und der Bericht des Erzbischofs Peter über die Tartaren”, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen*, 6, 1956, S. 125–202. 近年の研究として Роман Хайрага, “Ранние венгерские сведения о западном походе монголов (1235–1242)”, *Rossica Antiqua*, 10, 2014, c. 71–101.
- (5) British Museum, Royal MS, Reg. 14, C. 7. Henry Richards Luard (ed.), *Matthaei Parisiensis, monachi Sancti Albani, Chronica maiora*, vol. V (A.D. 1248 to A.D. 1259), London, Longman & Co., 1880, pp. vii–xx を参照。
- (6) Giovanni di Pian di Carpine, *Storia dei Mongoli*, Enrico Menestò et al. (a cura di), Spoleto, Centro italiano di studi sull'alto medioevo, 1989. この書は訳者が底本とした一九二九年の校訂本刊行後に発見された四写本が踏まえられており、またイタリヤ語訳と詳細な訳註が付されている。なお訳者の言及して、近年の重要な近代語訳として Johannes von Plano Carpini, *Kunde von den Mongolen (1245–1247)*, Felicitas Schmieder (übers.), Sigmaringen, Thorbecke, 1997 (ユーン語訳); Jean de Plancaupin, *Dans l'empire mongol*, Thomas Tanase (trad.), Toulouse, Anacharsis, 2014 (フランス語訳)。
- (7) 本書は言及されなが、このミネディクトゥスによる一四七七年の別の報告を、フランシスコ会士のブリディアが『Hystoria Tartarorum』として記録しており、この邦訳が出版されている。海老澤哲雄、宇野伸浩、C. de Brida による Hystoria Tartarorum 訳・注 (1) (2) 『内陸アジア言語の研究』一〇号、一九九五年、一三二–一六五頁 および一一号、一九九六年、六七–一二〇頁。
- (8) 本書簡は、訳者が依拠した MGH 版ではなく、以下の新版を用いるほうがよい。Karl-Ernst Lippman, *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und*

高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』（村田

mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihrer Briefwechsel, Città del Vaticano, Biblioteca Apostolica Vaticana, 1981, S. 146-149 (Nr. 21).

- (6) グユクのヘルシア語返書にはすでに複数の日本語訳があり、それらの存在にも触れるべきだっただろう。海老澤哲雄「グユクの教皇あてラテン語訳返書について」『帝京史学』一九九号、二〇〇四年、五九—八三頁；六二—六五頁および註一一に挙げられたさらなる先行訳を参照。またこのヘルシア語返書のラテン語版が、前述のヘネディクトウス・ポロヌス報告の末尾に付されているが（本書九六—九七頁）、両者の関係についても本註の海老澤論文を参照。

- (10) Jean Richard, *Au-delà de la Perse et de l'Arménie. L'Orient latin et la découverte de l'Asie intérieure : Quelques textes inégalement connus aux origines de l'alliance entre Franes et Mongols (1145-1262)*, Turnhout, Brepols Publishers, 2005, p. 83-158（フランス語訳）；Simon de Saint Quentin, *Bir Kesiş'in Anadolu Tatarlar ve Anadolu 1245-1248, Erendiz Ozbayoglu (Çev.)*, Alanya, Daklav Yayınları, 2006（トルコ語訳）。この他に、半分ほどの分量のロシア語訳が存在する（本書の章番号が1-18、20-21、31-52、および本書で省略された三つの章【次註参照】）；Николай Горелов, *Книга спрочетви, Санкт-Петербург, Азбука-классика*, 2006, с. 79-116。なお本訳書が出た後、オンラインで英語訳も出版された。Stephen Pow et al., *Simon of Saint-Quentin: History of the Tartars*, 2019 (www.simonofstquentin.org).

- (11) ただし信仰に関する若干の章が省略されている（XXXI-96,

XXXI-98, XXXII-53）。

- (12) 海老澤哲雄「モンゴル帝国と教皇使節——シモン修道士の対モンゴル交渉記録の再検討——」『埼玉大学紀要 教育学部（人文・社会科学Ⅱ）』三九巻一号、一九九〇年、二九—四二頁。

- (13) 海老澤哲雄「二二四七年のバイジュの教皇あて書簡について」『比較文化史研究』九号、二〇〇八年、二五一—四一頁。
(14) この点については Koji Murata, "The Mongols' Approach to Antolia and the Last Campaign of Emperor John III Vatatzes", *Greek, Roman, and Byzantine Studies*, 55-2, 2015, pp. 470-488; pp. 482-487.

- (15) このあたりの事情については、訳者が挙げる文献のほか、海老澤哲雄「モンゴル帝国Ⅱ西欧交渉史上の問題：「エルケルタイ」のルイ九世宛書簡の再検討」『東洋史研究』三五巻1号、一九七六年、八四—一〇八頁が重要である（エルケルタイ書簡の真正性への疑問）。

- (16) Guglielmo di Rubruck, *Viaggio in Mongolia*, Paolo Chiesa (a cura di), Milano, Fondazione Lorenzo Valla, 2011.

- (17) Peter Jackson & David Morgan, *The Mission of Friar William of Rubruck*, Indianapolis, The Hakluyt Society, 1990。本英訳は日本語でも紹介されている。宇野伸浩「書評：Peter Jackson & David Morgan, *The mission of Friar William of Rubruck*」『内陸アジア史研究』一二号、一九九七年、八九—九七頁。

- (18) 詳細は海老澤哲雄「ルイ王あてモンケ書簡・フレグ書簡覚書」『社会文化史学』五二号、二〇〇九年、三一—四八頁。

- (19) Riccoldo De Monte Croce, *Pègrination en Terre sainte et au Proche Orient / Lettres sur la chute de Saint-Jean d'Acre*, René Kappler (éd. et trad.), Paris, Honoré Champion, 1997 (本書の日本語訳に対応するのは p. 78-114)。
- (20) ラテン語版のごく初は訳者の用いた Köhler 版の他に次々有益 : Sven Dörper, *Die Geschichte der Mongolen durch Jean le Long. Traitéz des estas et des conditions de quatorze royaumes de Aise (1351). Kritische Edition. Mit parallelem Abdruck des lateinischen Manuskripts Wroclaw. Biblioteka Uniwersytecka, R 262*, Frankfurt am Main, Peter Lang, 1998。
- (21) 訳者が挙げていない近年の現代語訳として 'He tum the Historian's History of the Tartars: The Flower of Histories of the East', Robert Bedrosian (trans.), Long Branch, NJ, 2004 (英語訳。オンライン・リンクス); Hirokai Toporov, *Kniga smyrnemsui* (註 10), c. 211-274 (第一〜三卷 [三卷二〇一四四章を除く] および第四卷一〇章のロシア語訳)。
- (22) 訳者は一七世紀の刊本に基づいて「Lupprian, *Die Beziehungen* (註八), S. 255-257 (Nr. 54) に新版がある。」
- (23) 原文から (20) の日本語訳としては佐口透『モンゴル帝国と西洋』(平凡社、一九七〇年)、一九七一一一九九頁が挙げられる(当該頁ではこのからの翻訳が明示してないが、ドーン(佐口透訳注)『モンゴル帝国史』[平凡社、一九七六年]、二五六頁でこれが「原典からの和訳文」と注記してあるので、一応それに従う)。書簡テキストの校訂
- 版や他の情報のごく初は Yasuhiro Yokkaichi, "Chinese Seals in the Mongol Official Documents in Iran: Re-examination of the Sphragistic System in the Ilkhanid and Yuan Dynasties", in 新疆吐魯番字研究院編『吐魯番字研究 : 第三屆吐魯番字暨歐亞遊牧民族的起源与遷徙國際學術研討會論文集』(上海古籍出版社、二〇一〇年)、pp. 215-230, p. 225 を参照。
- (24) Odorico da Pordenone, *Relatio de mirabilibus orientaliū Tatarorum*, Annalia Marchisio (a cura di), Firenze, Sismel, Edizioni del Galluzzo, 2016。その翻訳のごく初は Annalia Marchisio, "Many Versions, One Edition. Odorico da Pordenone's Travel to China", *The Journal of Medieval Latin*, 26, 2016, pp. 43-75。
- (25) この二通は(訳者は明示しないが)ラテン語版のみで伝来する。訳者が利用した一七世紀の刊本の他に 'Georges Daumet (éd.), *Benoit XII, 1334-1342: lettres closes, patentes et ciriales se rapportant à la France*, Paris, Albert Fontemoling, 1899-1920, col. 337-338 (nos. 550-551) が通常参照される。教皇庁への使節派遣に関する最新の文献として Nam Jong-Kuk, "The Envoy to Pope Benedict XII Sent by the Great Khan in 1336", *Journal of Western Medieval History*, 44, 2019, pp. 101-126。
- (26) Irene Malfatto (a cura di), "Le depressioni sull'Oriente nel «Chronicon Bohemorum» di Giovanni de' Marignoli", in Rossana Eugenia Guglielmetti (a cura di), *E codicibus*, 2013, pp. i-xii & 1-28 (<http://eodlibus.sismelfirenze.it>)。訳者が挙げていない最近のフランス語訳として Jean

高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』（村田

de Marignoli, *Au jardin d'Éden*, Christine Gadrat (trad.), Toulouse, Anacharsis, 2009.

(27) Keagan Brewer (ed.), *Prester John: The Legend and its Sources*, Farnham, Ashgate, 2015.

(28) 近年の邦語研究として、森新太「顕示行為としての『商売の手引き』編纂…へゴロツティの『手引』を一例に」『パブリック・ヒストリー』一三三号、二〇一六年、七九—九二頁。

(29) Lauren Arnold, *Princely Gifts and Papal Treasures: The Franciscan Mission to China and Its Influence on the Art of the West, 1250-1350*, San Francisco, Desiderata Press, 1999.

(30) 評者の参照してきたのは英語版のみ。Georges Grosjean (ed.), *Mapamundi: the Catalan Atlas of the Year 1375*, Zurich, Urs Graf Publishing Company, 1978. ちなみに評者は参照できなかったが、以下の研究によれば二〇〇五—二〇〇八年にも新たなフアクシミリ版が出版されたとのこと。Montserrat Galera i Monegal, “Estudi raonat de les fonts documentals de l’Atlas català de 1375. Des del seu inici fins a l’actualitat”, *Treballs de la Societat Catalana de Geografia*, 80, 2015, p. 9–66; p. 51–52.

(31) <http://www.cresquesproject.net/catalan-atlas-legends> (二〇二〇年一月二九日最終確認)。

(32) 杉山正明「東西の世界図が語る人類最初の大地平」藤井譲治、杉山正明、金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会、二〇〇七年、五四—八三頁（本文献は早川尚志氏にご教示頂いた。感謝申し上げます）。

(33) この点において、たとえば護雅夫によるカルピニヤルブルク旧訳の価値は失われていない。

(34) 本書全体のテーマであるヨーロッパ世界と東方（モンゴル）との関係についての近年の動向として、小澤実「モンゴル帝国期以降のヨーロッパとユーラシア世界との交渉」『東洋史研究』七一巻三号、二〇一二年、四三八—四二三頁。この動向論文以降の重要な研究として一点のみ挙げておく。Thomas Tanase, « *Jusqu'aux limites du monde. La papauté et la mission franciscaine, de l'Asie de Marco Polo à l'Amérique de Christophe Colomb* », Rome, Editions de l'École française de Rome, 2013.

(35) 四日市康博「高田英樹〔訳〕『マルコ・ポーロ ルスティ ケツロ・ダ・ピーサ 世界の記：「東方見聞録」対校訳』『内陸アジア史研究』三一号、二〇一六年、一八五—一九六頁：一八九頁。

(36) 本書評の準備にあたって、名古屋大学出版会より書評した書籍の提供を受けた。記して感謝申し上げる。また執筆に際して日本学術振興会科研費（19K13389）の支援を受けた。

（名古屋大学高等研究院特任助教）